

平成19年度 国語 (50分)

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけない。
- 2 この問題冊子は18ページである。
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- 3 試験開始前に、監督者の指示に従って、解答用紙の該当欄に以下の内容をそれぞれ正しく記入し、マークすること。
 - ・①氏名欄
氏名を記入すること。
 - ・②受験番号、③生年月日、④受験地欄
受験番号、生年月日を記入し、さらにマーク欄に受験番号(数字)、生年月日(年号・数字)、受験地をマークすること。
- 4 受験番号、生年月日、受験地が正しくマークされていない場合は、採点できないことがある。
- 5 解答は、解答用紙の解答欄にマークすること。例えば、

10

と表示のある解答番号に対して②と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の②にマークすること。

(例)

解答 番号	解 答 欄				
10	①	②	③	④	⑤

- 6 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってよい。

1

次の文章を読んで、後の問1～問4に答えよ。

「月曜日に出すから、夜までに書いといて」

巧は立ち上がった。もう二時を過ぎている。豪が待っていると思うと、気がせいた。

「巧、ちよつと待ちなさい。なによ、その態度。それが、ものを頼む態度なの」

巧は、母と向かい合ったまま黙っていた。時計の音が聞こえる。

「親子でもね、ものを頼むときの言葉とか口調^(ア)であるのよ。ぽんと紙を放り出して、書いといではないでしょう。あんた、どうして、いつも人に命令するの」

「命令なんかしてない」

「じゃ、それで頼んでるつもり?」

頼んだつもりもなかった。自分の入部届だ。それに保護者の直筆の名前と印がある。それだけのことだ。母に頭を下げるようなことではない。

「母さん、おれが野球部に入らつて決めたんだ」

「わかっているわよ、そんなこと。私がすすめるわけないでしょ」

「おれが決めたことをおれがやるのに、母さんに頼む必要はないだろ」

真紀子の頬がびくつと動く。巧の目にもはつきり見えた。

「どうしてそんな考え方しかできないの。親の了解があるから入部届があるんでしょ。それなら、ちゃんと了解してくれて頼むのが、すじじやないの」

(注1)

洋三が、軽く咳をした。

「真紀子、いいかげんにしとけ。たかが入部届ひとつに、なんでそんなにいらつく」

「お父さんは黙ってて。巧は、いつもこうなのよ。ひとりでも決めて当たり前前みたい顔して。自分が決めたことに人が従うのが当たり前前み

たいな考え、いつまでも通用しないわよ。もし、わたしが野球部に入るの反対って言ったらどうするの」

「母さんの反対なんて、関係ないよ」

巧は、手の甲でゆっくり口のまわりをぬぐった。時計を見る。二時十五分。豪が待っている。ひとりでランニングを始めたかもしれない。真紀子の頬が緩んで、かすかな笑い顔になった。

「関係ない？ そうね、そう言うと思ったわ。けど、泥だらけになったユニフォームを洗うのはだれ？ 試合のとき、お弁当作るのはだれ？ ポールやグラブやバットを買うのはだれなのよ。巧、あなたが野球するのは勝手よ。だけど、まわりの人間に支えられているって気持ち、少しはあってもいいんじゃないの」

だから頼めというのか。野球部に入りたいから認めてくださいと、頭を下げるというのか。巧はこぶしを握り締めた。

母の言うことがまちがっているとは思わない。少年野球のチームにいたときも、泥の染みこんだユニフォームを、母は丹念に何度も洗ってくれた。早朝の試合のときも、必ず弁当を作ってくれた。1の背番号をきつちりと真つ直ぐに縫いつけてくれた。わかっている。

「母さんに、また迷惑かけるかもしれないけど、おれ野球をやりたいんだ。よろしく頼みます」

その一言でいいのだ。ちよつとおどけたしぐさで、頭ひとつ下げればすむことだ。それもわかっている。なのに、巧は立ったままこぶしを握り締めていた。 テーブルの上の入部届が目染みる。

(なんであんなものが必要なんだ)

ふいに、そう思った。野球がしたいのだ。あの白いボールを投げて、打って、走ってみたい。その思いをとげるために、なんであんな紙があるのだろう。親の了解なんてことが必要なのだろう。自分の名前だけなら自分で書ける。なんで、それだけではだめなんだろう。中学の野球部に入る。ただそれだけのことが、どうして自分ひとりの力で決められないのだろうか。

「母さん、お兄ちゃん、じいちゃん、みんな見て」

(注2)

青波が、飛びこんでくる。両手があわだらけだった。

「なあ、見て、見て」

親指と人さし指で輪を作り、青波はゆっくり息を吐いた。シャボンの玉が息に合わせてふくらんでくる。青波の手が横に動く。魔法のように、テニスボールほどのシャボン玉が宙に浮いた。

石鹼水の膜にさまざまな色を映して、巧の鼻のあたりに近づいてくる。思わず手が出た。指でシャボン玉をつつく。音もせず玉は割れて、目の前

から消えた。顔に石鹼水が散る。わっと声が出た。青波が笑う。真紀子も笑った。B 空気が揺らいで、柔らかくなった。巧は息をつく。「着がえて、公園に行ってくる」

「そう、あんまり暗くならないうちに帰るのよ」

真紀子の声はおだやかだった。巧は台所のドアを閉めて、もう一度息をついた。

「真紀子」

巧が閉めたドアにちらっと目をやって、洋三が名前を呼んだ。

「おまえ、言いすぎじゃぞ」

「わかってるわよ。自分でも言いすぎてるってわかってるの。なんだか、巧には言いすぎちゃうのよ。だめだって、もうやめなきゃいけないってわかってるのにね」

「まったく、むちゃくちゃな親じゃ。巧も苦労する」

「わたしばかり悪いみたいな言いかたしないで」

真紀子は、イスに座つてため息をついた。

「わたしね、心配してるのよ。ね、お父さん——」

目の奥が熱い。涙が浮かんでくる。父の前で涙を見せるのは久々のことだった。

「あの子、中学でちゃんとやっていけると思う？」

「ちゃんとして、どういう意味じゃ？」

「あの性格よ。今だって、ひとこと『頼むよ』って言えばすむことですよ。それが言えないの。人に頼んだり、あやまつたり、妥協したりってこと、全然できないのよ。あれで、中学生活なんてやっていける？ それでなくても、いじめとかなんとか問題多いのに。巧みたいに変わった子、きつとつぶされちゃうわ」

「巧が……つぶされる？」

洋三は、頭を後ろにそらせて笑った。

「あいつが、他人につぶされるようなたまか」

「お父さんは、巧びいきだから。わたし真剣に悩んでるのよ。なんとかしなくちゃって、あせってるの。小さいころから我が強い子だったけど、な

んか野球はじめて、ボールが速くなるのに比例して、どんどん性格も強くなっちゃったみたい。自分に自信があるってことと、他人に協調しないってことは、ちがうでしょ。そこそこ、教えとかなないと……なによ、なにがおかしいの、お父さん」

洋三は、笑っていた口元を慌てて押さえた。

「いやいや、感心したんじや。おまえは巧にあまりかまわんから、あの子のこと、なにも見てないのかと思うとったけどな。うん、ボールのスピードと性格の関係なんぞ、なかなか深い見方じや。それほど本気で心配してるんなら、ごちゃごちゃ言わんと、『巧、お母さんは、あんたのこと心配なのよ』って、素直に言うたればええのに」

洋三が、真紀子の声をまねる。青波が、カレーを頬ばったまま笑い声を上げた。

(あさのあつこ『バッテリーII』による。)

(注1) 洋三——真紀子の父、巧の祖父。

(注2) 青波——巧の弟。

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字の正しい読みを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は ～ 。

(ア) 口調

- ⑤ くちよう
- ④ こうちよう
- ③ こうちよう
- ② こうちよう
- ① ろんちよう

(イ) 直筆

- ⑤ たつびつ
- ④ こうひつ
- ③ じきひつ
- ② じかふで
- ① なおふで

(ウ) 緩んで

- ⑤ たる(んで)
- ④ ゆる(んで)
- ③ なご(んで)
- ② はず(んで)
- ① ほころ(んで)

(エ) 丹念

- ⑤ せんねん
- ④ たんねん
- ③ けんねん
- ② せんねん
- ① だんねん

(オ) 妥協

- ⑤ せいきよう
- ④ だきよう
- ③ ていきよう
- ② はんきよう
- ① ほきよう

問2 傍線部A 巧は立ったままこぶしを握り締めていた とあるが、これは巧のどのような様子を表しているか。最も適当なものを、次の①～

⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① 母親の言葉で自分の間違いに気付き、逆らったことを後悔して涙があふれてくるのを必死にこらえている。
- ② 母親の一方的な理由によってしかられることの理不尽さに、ひどく腹を立てている。
- ③ 母親に言い負かされそうになったのが悔しくて、どのように言い返したらいいのか考えている。
- ④ 昔からの夢であった野球部入部をあきらめなければならず、もうどうなってもいいと思いはじめている。
- ⑤ 入部するためには母親に頭を下げればいだけだとわかっていながらも、納得できずにいる。

問3 傍線部B 空気が揺らいで、柔らかくなった。 とあるが、これはどのような様子を表しているか。最も適当なものを、次の①～⑤のうち

から一つ選べ。解答番号は 7。

- ① 言いたいことをすべて言い合い、真紀子と巧の間のわだかまりが消えたということ。
- ② 真紀子や巧がそれぞれに抱いていた信念が揺らぎ、不安になったということ。
- ③ シャボン玉が割れて、親子のいさかいで緊迫していた雰囲気はややかになったということ。
- ④ 青波と真紀子に笑われて、巧がその場に居づらくなったということ。
- ⑤ 青波の場違いな言動によって、その場にいた人々が戸惑いを感じ始めたということ。

問4 本文の内容と合致しているものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 巧を必要以上に追及する真紀子に困り果てた洋三は、どんな忠告をしても無駄だとあきらめ始めている。
- ② 巧のことを心配するあまりに周りが見えなくなっている真紀子を、洋三は厳しく責めたてている。
- ③ 取り越し苦労をしているだけだと洋三に諭された真紀子は、自分の間違いに気づき前向きに考えようとしている。
- ④ 洋三は、巧への真剣な思いをうまく表せない真紀子をたしなめながらも、その心情を受けとめている。
- ⑤ 真剣に取り合ってくれない洋三の態度に失望した真紀子は、自分一人で解決しようと決意している。

次の文章を読んで、後の問1〜問5に答えよ。

私たちはだいたい一日十四、五時間を起きて生活している。いま、そのきのうの一日を思い出してほしい。たとえば「朝起きて、顔を洗い、新聞を読みながらトーストを食べ、ちよつと雑談をして学校や会社へ行つて……」というふうに。

こういった一日を思い出すのに、きのう一日ぶんの十四、五時間がかかるわけではない。一日ぶん思い出すのに一日をかけていたら、たいへんだ。^(注1)ポール・オースターの小説の登場人物のようにいつまでたつても思い出の中に生きていることになる。だから、誰もそんなことはしない。もつと速く思い出す。けれども、じつは一時間をかけて思い出すことも、ふつうの人には^(注2)タ^アえられないものである。せいぜい五分か六分で、思い出すことになる。

これは私たちのアタマの中で、一日の出来事が五、六分程度にダイジェストできることを示している。すなわち、十四、五時間の情報は、ただかか五、六分の情報に短縮できるのだ。

これを(情報圧縮)という。^Aじつに不思議なことである。そして、これが脳の編集力の秘密のひとつなのである。これは、私たちのアタマの中がおよそ九〇分対五分、もつと数字的にいえば、およそ二〇〇対一の情報短縮比率によつて整理されたがっているということを示している。すなわち、大半の情報は情報圧縮された状態で脳の中に入れられているものなのだ。では、なぜこのようなことがおこるのか。

机の上にコップがある。

このコップを見ているということは、そこに注意を向けているということである。この「注意を向ける」ということが、^B編集を起動させる第一条件で、そこに注意を向けられないかぎり、どんな編集もおこらない。

注意とは、わかりやすくいえば、その対象にイメ^メ、ジ^ジの端子をそそぐことである。コップならコップという区切りを自分に対応させるのである。コップから注意を離すことも可能だ。机の上のコップの隣に電話機があれば、そこに注意をすばやく移すことになる。そしてコップと電話機だけに注意が向けられたという記録が残る。それ以外の、空気とか机とか、机の上ののっているものとか、埃^{ほこり}とか色とかは、背景に消し去られる。

もともと情報には、情報の「地」(ground)と情報の「図」(figure)というものがある。「地」は情報の背景的なものであり、「図」はその背景ののっている情報の図柄をさす。私たちは、おおむね情報の「図」だけに注意しながら日常生活をしているといつてよい。背景はあまりにも連続しすぎているので、

それを省いてしまうのだ。だからこそ、きのう一日のことを思い出すばあいは、総計九〇〇分の情報の「地」から、圧縮した五分ぶんだけの情報の「図」を取り出せる。

私は一時期、ある高名な精神医学者と仕事をともにしたことがあるのだが、そこでずいぶん興味深い現象を観察させてもらった。いまおもえば、貴重な体験だった。

ある患者は「この机の上にあるものを言ってください」という医師の質問にたいして、コップや電話機だけの情報の「図」をまったく抽出できない。「ええっと、机の端に黒い盛り上がったものがありますね。それが少し曲がっていて、紙のような文字が書いてある平べったいものとながっていて、そこから少し離れているんですが、白くて丸い明るいものがじつとしていますね」などというふうには、情報の「地」と「図」の関係が曖昧あいまいになっっていく。

私たちにも似たような「地」と「図」の混乱はおきている。

机の上のコップや電話機ならまだしも、ちよつとめんどうな現象の説明になると、たちまちにして「地」と「図」を分けられなくなってしまっていることが少なくない。たとえば「最近の日本経済の動向について」という問題については、「ええっと、大企業は成長がとまっているし、政府の経済セイ|クもさっぱりで、おまけにアメリカからの外圧も激しいうえに、アジアの、たとえば中国の急成長なんかもあって……」などと、しどろもどろなのである。不得意な分野にたいしては、〈情報圧縮〉がおこりにくくなるわけだ。

一本の草花を前にしても、同じことがおこる。「この植物についてクワくわしく観察してください」などと言われると、何が情報の「地」で何を情報の「図」にするか、うまく説明できなくなる。そこに茎があり、葉があり、花があること以上に観察を分化できないのだ。けれども日常生活はそれで困らない。誕生日にたくさんのお花をもらっても、そのいちいちの花の名前がわからずとも、「ああ、きれいな赤い花だなあ」とおもっていればすむ。

このような私たちの「注意のしかた」の濃淡をもつと気をつけて見ると、なかなかおもしろい問題がたくさん出てくる。

たとえば、コップという一つの物体は、べつだんそれを「コップ」とよばなくてもいいはずで、「ガラス製品」とか「日用品」とか「グラス」とかよんでもかまわない。水が入ったコップは「キラキラとしたきれいなもの」というものでもある。それなのに、ふだんはコップを「コップ」として片付ける。

すなわち、私たちはコップというものをたくさん言葉(イメージ)の集合性によって理解しているにもかかわらず、それらを「コップ」という単一の知識ラベルでもって認識できるようにしているのである。

では、コップ、グラス、日用品、ガラス製品、きらきらしたもの、などは何かといえば、それも知識レベルである。コップをとりまいて、そういういくつもの知識レベルがネットワーク状に密集しているのだと考えればよい。

脳の中では、これらの知識レベルは一応は別々のところに貼^はられている。そして、それらの知識レベルはその奥にまたいくつもの知識レベルをこまごまと引き連れている。どれが親レベルで、どれが子レベルで、どれが孫レベルであるかということは、はっきりしない。というよりも、あえて主従関係をつくらないようにしていると見るべきである。

その証拠には、自分で適当な連想ゲームしてみるとよい。「コップ」から連想されるのが「日用品」や「ガラス製品」であっても、「日用品」から連想されるのは必ずしも「コップ」ではなくて、「歯ブラシ」とか「たわし」とか「モップ」であるかもしれない。「ガラス製品」から連想されるのは「しびん」であるかもしれないのだ。しかも「モップ」からは「掃除」^(エ)がハセイし、「しびん」からは「病院」が出てくる。

つまり、私たちの知識レベルは脳の中ではかなり複雑なリンクを張っていて、その一端にひっかかっている端末の知識レベルをクリックしただけでは、何が出てくるのやらわからないほどののだ。これを編集工学ではハイパーリンク状態という。

しかし、いったん連想を開始してみると、とたんに、それらはみごとに情報連鎖の線(リンク)を通してつながってくる。別々のところに貼られているラベルなのに、そこにはあたかもあらかじめ無数の線が張りめぐらされていたかのようなのだ。

ようするに「注意」を向けたところが「仮の親」になり、次々に子レベルを、その子レベルが孫レベルを引き出してくるのである。このとき、脳の中で注意を向けられた「仮の親」が「図」になっていく。

脳というものはそうなっている。

脳の中は、知識やイメージを無数の「図」のリンクを張りめぐらしているハイパーリンクなのである。これを(意味単位のネットワーク)とよぶことにする。コップはひとつの意味単位であり、ガラス製品もひとつの意味単位である。それらが次々につながり、ネットワークをつくっている。けれども、そのネットワークは一層的不是な。多層的(マルチレイヤー的)で、立体的である。そのため、これはえらそうな思想家たちがしばしば口にすることであるが、「言葉は多義的である」などと感ぜられることになる。

このような(意味単位のネットワーク)を進むことを、私たちはごく一般的に「考える」と言っている。「考える」とは、ひとまずネットワークの中の「図」のリンクをたどってみるといふことなのだ。ただし、ここでひとつ重大な問題が出てくる。それは、ネットワークを進むにしても、どの道筋を進

むかということである。つまりどこで分岐するかということだ。それによつては千差万別の考え方になつてしまふ。そこで、ある道筋を進んだとして、そこで「あつ、これはちがうぞ」とおもつて、ひとつ手前の分岐点に引き返すというようなことがおこることになる。もっと以前の分岐点にまで戻ることもある。何度も引き返しはおこることだろう。

このジグザグした進行が、「考える」ということの正体なのだ。それがハイパーリンク状態である。思想とは、畢竟、そのジグザグとした進行の

コウセキのことにほかならない。

(松岡正剛『知の編集工学』による。)

(注1) ポール・オースター——一九四七年生まれ。アメリカの小説家。

問1 傍線部(ア)～(オ)に当たる漢字を、次の各群の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

(ア) タ|えられない

9

- ⑤ 退 ④ 待 ③ 耐 ② 妙 ① 絶

(イ) セイ|サク

10

- ⑤ 削 ④ 錯 ③ 索 ② 策 ① 作

(ウ) クワ|しく

11

- ⑤ 詳 ④ 細 ③ 加 ② 訓 ① 企

(エ) ハ|セイ

12

- ⑤ 覇 ④ 羽 ③ 破 ② 派 ① 葉

(オ) コウ|セキ

13

- ⑤ 黄 ④ 交 ③ 港 ② 抗 ① 航

9

13

問2 傍線部A じつに不思議なことである。 とあるが、どのようなことが不思議なのか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 長期間、記憶を保存することによって、いつまでも思い出の中に生きていることができること。
- ② 一日の出来事を思い出すのに、きのう一日ぶんの十四、五時間がかかること。
- ③ 起きている間のすべての出来事を、時間の流れに従って順番に思い出すことができること。
- ④ 私たちのアタマの中で、一日の出来事が五、六分程度にダイジェストできること。
- ⑤ 情報の質や量に応じて情報短縮比率を変えて、情報の整理が行われていること。

問3 傍線部B 編集を起動させる とあるが、ここでの「編集」とは、どのようなことか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 情報の「図」から情報の「地」を取り出すこと。
- ② 情報の「地」から情報の「図」を取り出すこと。
- ③ 情報の「地」と「図」を同時に取り出すこと。
- ④ 情報の「地」と「図」を入れかえること。
- ⑤ 情報の「地」の連続性を意識し続けること。

問4 傍線部C 自分で適当な連想ゲームをしてみるとよい とあるが、連想ゲームをすることで何がわかるのか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 16。

- ① 連想を始めたたん、たくさんの情報がすでに決まった方向性を持つてつながってゆくこと。
- ② ひとつひとつの物をたくさんの言葉によって理解しながら、同時に単一の知識ラベルでも認識できるようにしていること。
- ③ 「仮の親」が「子ラベル」や「孫ラベル」を次々と引き出しても、それは情報連鎖のリンクとはならないこと。
- ④ 連想を開始すると知識ラベルは、「親ラベル」から「孫ラベル」まで主従関係を持つとうとすること。
- ⑤ 端末の知識ラベルから連想されるものが無数にあり、脳の中に複雑なリンクが張られていること。

問5 傍線部D 「考える」ということの正体 とあるが、これはどのようなことか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 17。

- ① 多層的、立体的なネットワークを不可逆的に進むこと。
- ② 多層的、立体的なネットワークを駆使して、どれが最短の道筋かを決めて進むこと。
- ③ 〈意味単位のネットワーク〉を時にはもとに戻りながら進むこと。
- ④ 〈意味単位のネットワーク〉の全体像をつかもうとすること。
- ⑤ 〈意味単位のネットワーク〉を思想にまで高めようとする事。

次の文章を読んで、後の問1～問5に答えよ。

(注1) 侍従大納言成通卿、そのかみ、九歳にてわらははやみし給ひけり。年ごろ祈りけるながし僧都とかや言ふ人呼びて、祈らせけれど、かひなく発(注2)りければ、父の民部卿ことに嘆き給ひて、傍に添ひ居て、見あつかひ給ふ間に、母君と言ひ合はせつつ、「さりとて、いかがはせむ。この度は異僧をこそ呼ばめ。いづれかよかるべき。」などのたまひけるを、この児臥しながら聞きて、民部卿に聞こえ給ふ。「なほこの度は僧都を呼び給へかしと思ふなり。その故は、乳母などの申すを聞けば、まだ腹の内なりける時より、この人を祈りの師と頼みて、生まれて今九つになるまで、ことゆゑなくて侍(注4)るは、ひとへにかの人の徳なり。それに、今日この病によりて、口惜しく思はんことのと不便に侍るなり。もし異僧を呼び給ひたらば、たとひ落ちたりとも、なほ本意にあらず。いはんや、必ず落ちんことも難し。さりとも、これにて死ぬるほどのことはよも侍らじ。我をおぼさば、幾度もなほこの人呼び給へ。つひにはさりともやみなん。」と苦しげなるをためらひつつ聞こえ給ふに、民部卿も母上も、涙を流しつつ、あはれに思ひよせたり。C「をさなき思ひばかりには劣りてけり。」とて、またのあたり日、僧都を呼びて、ありのままにこの次第を語り給ふ。「隠し奉るべきことに侍らず。(注9)御事をおろかに思ふにはあらねども、かれがなやみ煩ひ侍るけしきを見るに、心もほれて、おぼされむことも知らず、しかしかのことをうちうち申すを知りて、このをさなき者のかく申し侍るなり」。涙を押しのごひつつ語り給ふに、僧都おろかにおぼされむや。Dその日ことに信をいたしき。泣く泣く祈り給ひければ、きはやかに落ち給ひにけり。

この君は、をさなくより、かかる心を持ち給ひて、君に仕うまつり、人にまじはるにつけても、事にふれつつ情ふかく、優なる名をとめ給へるなり。

(『発心集』による。)

(注1) 侍従大納言成通卿——藤原成通。侍従は天皇の近くで補佐あるいは雑事にあたる職。

(注2) わらははやみ——熱病の一種。一定の時間をおいて高熱を発する。

(注3) 民部卿——藤原宗通。藤原成通の父。

(注4) ことゆゑなくて侍るは——無事でありましたのは。

(注5) 口惜しく——頼りなく。

(注6) 落ちたりとも——病気が治ったとしても。

(注7) ためらひつつ——息をしずつめては。

(注8) またのあたり日——次の祈りを行う日。

(注9) 御事をおろかに思ふにはあらねども——あなたのことをおろそかに思うのではないが。

(注10) 心もほれて——ぼんやりして。

問1 傍線部A この度は異僧をこそ呼ばぬ。とあるが、今回は別の僧を呼ぼうと両親が話し合った理由として最も適当なものを、次の①～⑤

のうちから一つ選べ。解答番号は

18。

- ① 長年頼りとしている僧都とは別の僧に依頼したが、「わらはやみ」が少しも回復しなかったため。
- ② 長年頼りとしている僧都自身が「わらはやみ」にかかってしまい、別の僧に頼まざるを得なくなったため。
- ③ 長年頼りとしている僧都に「わらはやみ」を治すための祈りをさせたが、効果がなく熱が上がったため。
- ④ 長年頼りとしている僧都が、「わらはやみ」を治すことは自分の力ではできないと言ったため。
- ⑤ 長年頼りとしている僧都が、以前「わらはやみ」を治すことを得意とする別の僧を紹介してくれたため。

問2 傍線部B なほ本意にあらざ とあるが、成通がこのように言ったのはなぜか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 19。

- ① 今まで無事に過ごせた恩を感じて、今回も同じ僧都に祈ってもらいたかったから。
- ② 今まで世話になっていいる僧都の「わらはやみ」の祈りに対し、不自信を抱いたから。
- ③ 長年祈ってもらったにもかかわらず、何度も病気を繰り返し返して不安に思っていたから。
- ④ 死ぬほどの大病ではないので、今回はだれにも頼らず自らの力で治したいと思ったから。
- ⑤ 両親の強引なやり方に対して今までずっと我慢していたが、こらえきれなくなったから。

問3 傍線部C をさなき思ひばかりには劣りてけり。 とあるが、我が子の考えに比べて親が劣っていると感じたのはどのような点か。最も適当な

ものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 20。

- ① 我が子の病気を治すことばかり考えて、我が家の将来を見通していなかった点。
- ② 我が子の病気を治すことで精一杯になり、僧都に対する配慮に欠けていた点。
- ③ 我が子の病気に関する知識がなく、冷静に治療方法を考えることができなかった点。
- ④ 僧都をあまりにも信頼したために、祈りに効果がないことに気付かなかった点。
- ⑤ 僧都を信頼し過ぎたために、別の僧に頼むことを検討すらしないでいた点。

問4 傍線部D その日ことに信をいたしき。 とあるが、なぜ僧都は心を込めて祈ったのか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選

べ。解答番号は 21。

- ① 別の僧都に祈りの師の立場を奪われたが、両親が祈りの機会をもう一度与えてくれたから。
- ② 成通の病気は完治させたはずだと考えていたが、自分の不注意で思いがけず再発させてしまったことを知ったから。
- ③ 両親が自分のことを信じて成通を説得してくれたので、その期待に何としてもこたえてあげたいと思ったから。
- ④ 両親が自分の実力を低く見て別の僧を呼んだので、名誉を挽回ばんかいするために祈りの実力を発揮しようと考えたから。
- ⑤ 長年祈ってきた自分を信じてくれた成通の気持ちや、成通に対する両親のひたむきな思いを感じとったから。

問5 成通卿の人物像を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 22。

- ① 新しいことを受け入れられず、いつまでも自分の考えに固執する人物。
- ② 人の言うことを気にしすぎるあまり、物事の判断が確にできない人物。
- ③ 古いしきたりを重んじながらも、斬新な考えをもつことができる人物。
- ④ 人と人とのつながりを大切にし、周囲の人を思いやることができる人物。
- ⑤ 相手の気持ちを考えることなく、常に自分の主張を貫きとおす人物。

次の文章を読んで、後の問1～問5に答えよ。(設問の都合で返り点を省いたところがある。)

子^(注1)発^{ムルモ}攻^レ秦^(注2)、軍^ハ絶^ツ糧^ヲ。使^{シメ}人^{ヲシテ}請^ハ於^ニ王^ニ、因^{リテ}歸^{ツテ}問^{ハシム}其^{ソノ}母^ヲ。母^{ヒテ}問^ニ使^ニ者^ニ曰^{ハク}、「士卒^(注3)得^{タル}無^レ恙^乎」。

恙^{ツガ}乎^{ヤト}。」对^{コタヘテ}曰^{ハク}、「士卒^ハ并^ニ分^{カチテ}菽^(注5)粒^{シユククリフヲ}而^レ食^ク之^ヲ。」又^{マタ}問^フ、「将^ハ軍^{タル}得^レ無^レ恙^乎。」对^{ヘテ}曰^{ハク}、「将^ハ軍^ハ

朝^{チウ}夕^{シウ}芻^(注6)豢^(注7)・黍^(注7)梁^(注7)。」子^ニ発^{リテ}破^ラ秦^ヲ而^{ルモ}歸^{ルモ}、其^ノ母^{チテ}閉^ラ門^ヲ而^ズ不^レ内^レ。使^{メテ}人^{ヲシテ}数^(注8)之^ヲ曰^{ハク}、「子^ハ不^レ聞^カ

越^{コウ}王^(注9)句^{セン}踐^の之^{ウチシラ}伐^ヲ、吳^ヤ耶^ニ。客^ニ有^リ献^{ズル}醇^{ジユン}酒^{シユ}一^ヲ器^ヲ者^ヲ。王^メ使^{シメ}人^{ヲシテ}注^ガ江^ニ之^ノ上^ニ流^ニ、使^ム士^{ヲシテ}卒^{ヲシテ}飲^マ

其^ノ下^ニ流^ニ。味^ハ不^レ及^バ加^{フル}美^ニ、而^{シテ}士^ヲ卒^ヲ戰^{フコト}自^{オのづか}五^{セリト}也^ヲ。」
(『列女伝』による。)

(注1) 子発——人名。楚(国名)の将軍。

(注2) 秦——国名。

(注3) 士卒——兵士。軍兵。

(注4) 無恙——心配がない。病気がない。無事である。

(注5) 菽粒——豆と雑穀の屑。

(注6) 芻豢——豚などの獣肉。

(注7) 黍梁——上等の黍飯。

(注8) 数——責める。

(注9) 句踐——人名。春秋時代の越(国名)の王。吳王夫差との戦いにいったん敗れたが、長い間苦勞を重ね、国力を蓄えて再度の決戦に勝

(注10) 醇酒——よく熟した味の濃い酒。

問1 傍線部A 因帰問其母 とあるが、だれがだれに母を見舞わせたのか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 23。

- ① 子発が王に
- ② 子発が使者に
- ③ 王が子発に
- ④ 王が使者に
- ⑤ 使者が子発に

問2 傍線部B・Dの之はそれぞれ何を指しているか。その組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 24。

- ① B 菽粒 D 子発
- ② B 菽粒 D 士卒
- ③ B 軍糧 D 使者
- ④ B 芻豢・黍粱 D 使者
- ⑤ B 芻豢・黍粱 D 子発

問3 傍線部C 子発破秦而帰、其母閉門而不内。 とあるが、「母が門を閉じて子発を入れなかった」理由として最も適当なものを、次

の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 25。

- ① 軍糧が尽きたことくらいで、すぐに王の助けを請ういくじのない行動をとがめるため。
- ② 越王句踐のまねをすることで、なんとか部下の信頼を得ようとする器量の狭さを嘆いたため。
- ③ 手柄を立てて得意になり、母に何のたよりもよこさなかったことを不満に思ったため。
- ④ 部下の命を無駄にしてまで、戦いに勝とうとした身勝手な考えをただすため。
- ⑤ 将としての才能はあっても、部下のことを思いやる気持ちを持たない態度に反省を促すため。

問4 傍線部E 客有献醇酒一器者。は、「客に醇酒一器を献ずる者有り。」と読む。返り点のつけ方として最も適当なものを、次の①～

⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 26。

- ① 客有^レ献^ニ醇酒一器^一者。
- ② 客有^レ献^レ醇酒一器^一者。
- ③ 客有^ニ献^レ醇酒一器^一者。
- ④ 客^下有^ニ献^レ醇酒一器^一者^上。
- ⑤ 客有^下献^ニ醇酒一器^一者^上。

問5 傍線部F 味不及加美、而士卒戦自五也。とは、どういうことか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 27。

- ① 越王句踐に恩義を感じ、五人の部下たちが改めて忠誠を誓ったということ。
- ② 越王句踐を見習った子発であったが、部下たちの信頼は得られなかったということ。
- ③ 越王句踐の心づかいを意気を感じた部下たちは、気力を一層ふりしぼって戦ったということ。
- ④ 越王句踐の行動に疑問を持った部下たちは、自らの力で苦境を乗り越えていったということ。
- ⑤ 越王句踐を心から信じている部下たちは、五倍の戦力の敵にも平気で立ち向かったということ。